

提婆品の挿入位置について

有 賀 要 延

提婆品の法華経への挿入については本田義英博士が之を第五次後分（法華経論P一二六）に配している如く、原始法華経の成立からは可成りおくれた時期に附加されたものである。そして此の提婆品は原始法華経結集集団とは別な集団において構成されたものであると見ることが出来る。その理由として、法華経の呼称の用例に相違のある点を挙げる事が出来る。即ち第一章（序品）第三章（譬喩品）第七章（化城喩品）第十一章（見宝塔品）第十七章（隨喜功德品）第十九章（常不輕品）第二〇章（神力品）第二一章（ガラニ品）第二二章（藥王品）第二三章（妙音品）第二二五章（妙莊嚴王品）第二六章（普賢品）の各章において法華経を指す場合 *Saddharma-puṇḍarīkaṃ dharm-a-paryāyaṃ sūtram* が用いられているが、提婆品に於て

はかかる用例はなく、*Sadd-harmapuṇḍarīkaṃ nāma sūtram* が用いられており、*dharm-a-paryāyaṃ* が除かれている。他の各章の成立を見た同じ集団で構成されたものであるならば提婆品のみがかかる異った表現を用いる必要はない筈である。

此処に提婆品の異質な一面を見ることが出来る。提婆品の法華経における位置は梵本・正法華・妙法華のいづれも宝塔品と勸持品との間に置かれている点は一致している。宝塔品と勸持品とは内容文脈において連絡しているものであり、提婆品の挿入は此の文脈を敢えて分断するものであるが、かくまでして何故に挿入されたか、という事が問題とされる。提婆品中「至於仏前頭面敬礼二世尊足」と記されているが、之は成立史的には宝塔品の存在があつて後に提婆品が成立する事を物語るものであり、内容的には宝塔品以後に提婆品が置かれる事を示している。しかしながらこれだけでは、第十一章以後における位置の決定は出来ない。そこで挙げられるのが授記の配列である。法華経における授記は其の一乗の立場を授記という事例をもって明確

にしよとしたものである。そして此の授記は第三章（譬喩品）の舍利弗の受記に始まり、第六章（授記品）の摩訶迦葉、須菩提、迦旃延、目犍連、第八章（五百弟子受記品）の富楼那・阿若憍陳如・優樓頻螺迦葉・迦那迦葉・那提迦葉・迦留陀夷・優陀夷・阿菟婁駄・離婆多・劫賓那・薄拘羅・周陀・莎伽陀・第九章（授学無学人記品）の阿難・羅睺羅迄・個人名を挙げて授記が語られている之等の比丘衆は釈尊の直弟子であり、教団の主力となっていた実在の比丘達である。之に続くのが第十一章における提婆達多の授記である。提婆達多は歴史的事実として釈迦牟尼及び教団に対する異端者であった。この提婆達多の授記を二乗作仏を示す比丘衆の授記の次に挿入すると同時に、文殊師利によって法華経の教化を受けた竜女の変成男子・作仏の様相を示して、第十二章（勸持品）の摩訶波闍波提尼、耶輸陀羅尼の授記に関連せしめている。即ち、法華経の主要な思想としての二乗作仏を先づ男性である各比丘の授記をもって記述し、原始教団以来悪人とされ、教団の異端者である提婆達多の授記を以て之をしめくくり、女性に対して

は大乗仏教における重要な問題とされてきた変成男子の思想をもつ竜女作仏をポイントとして、摩訶波闍波提尼、耶輸陀羅尼の授記をもって比丘尼衆の授記を代表せしめて、法華経における授記の配列が整えられるという結果をもたらすに至ったという事が出来る。此処に第十一章（見宝塔品）と第十二章（勸持品）との文脈を敢えて分断してまで提婆品を挿入した最大の要因を見るものであり、法華経における提婆品の位置は「授記」の配列によって決定されたものであると推定し得るものである。

日蓮聖人思想における 開眼供養の理念と論理

伊 藤 瑞 敷

右表題の下に開眼供養について言及されている回向功德鈔、真開眼迦仏御供養逐状、草木成仏口決、木絵二像開眼事、四条金吾釈迦仏供養事などの諸御書を考察し加えて観